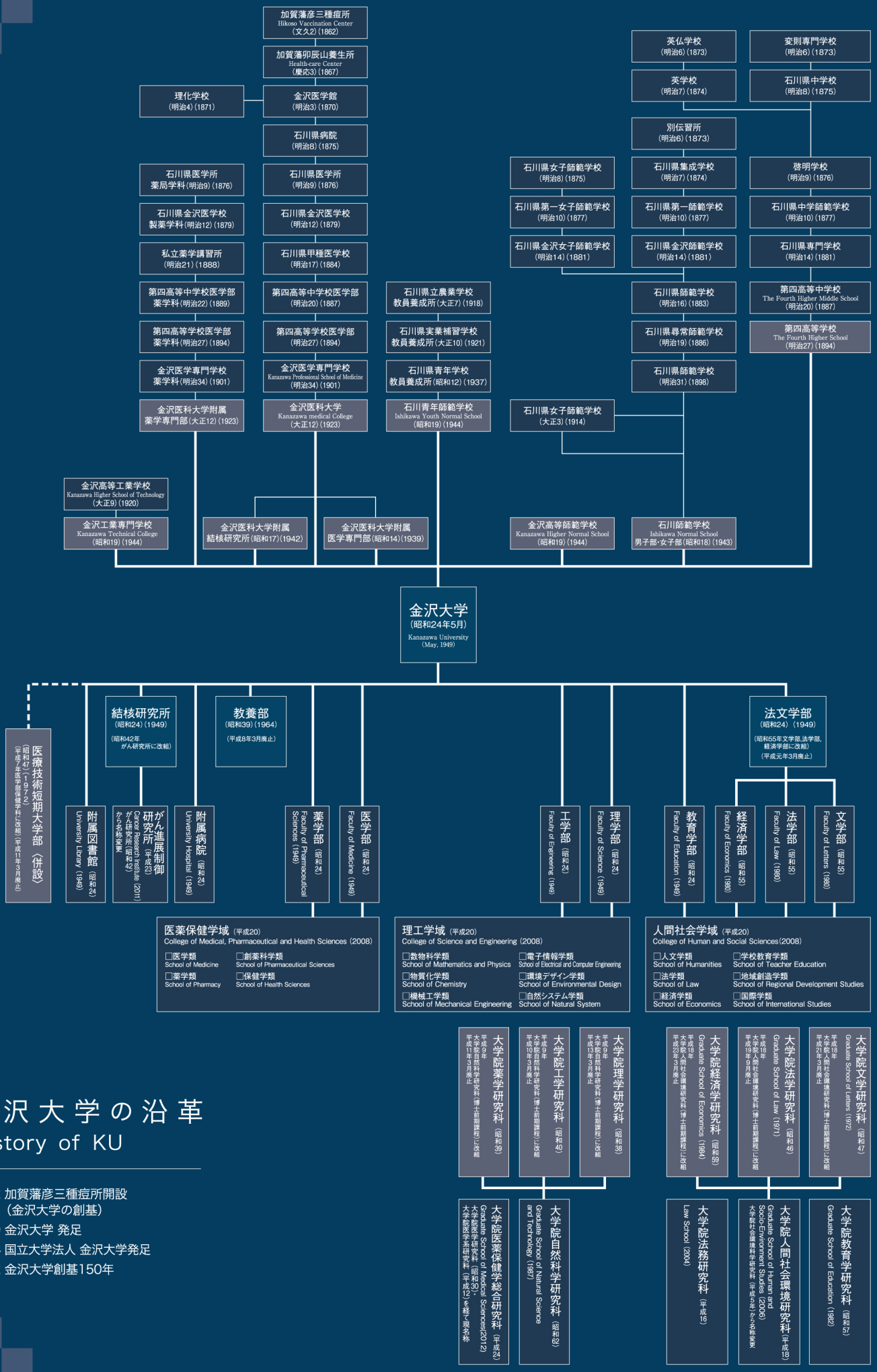
金沢大学創基150年記念事業関連企画　平成24年度　金沢大学資料館特別展

人物で見る金沢大学の150年

～その伝統と創造～

金沢大学資料館



金沢大学の沿革
History of KU

1862 加賀藩彦三種痘所開設
　　(金沢大学の創基)
1949 金沢大学 発足
2004 国立大学法人 金沢大学発足
2012 金沢大学創基150年

※昭和24(1949)年以前の前身校沿革は主要なものを示した。
平成23(2011)年4月現在。

ごあいさつ

2012年は、金沢大学の創基とされる加賀藩彦三種痘所の開設から150年の記念すべき年に当たります。金沢大学では、4年前より創基150年の記念事業がスタートし、金沢城内への「金沢大学誕生の地」石碑建立、彦三種痘所跡への「金沢大学発祥の地」石碑建立、「アジア5大学学長フォーラムin金沢」の開催、「金沢大学創基150年記念式典」の開催、『金沢大学創基150年史』の刊行など、数々の事業を展開してきました。金沢大学の歴史的資料を保管・展示する本資料館も、この創基150年記念事業にさまざまな協力をするとともに、関連企画として、3年がかりで本学の歴史を約50年ずつ遡っていく特別展のシリーズを開催してきました。

この記念の年も、残りあと3か月を切りました。そうした時期に開催することとなる2012年秋の資料館特別展は、この記念の年の終盤を飾るものとなりますので、それにふさわしい企画でなければなりません。そこで誕生したのが、記念事業をやってきた4年間をふりかえり、過去3年間の特別展の集大成となる150年間の通覧展示を行うという展示企画です。特に、この150年間の歴史を彩った本学（前身校を含む）出身者・教員等の人物に焦点を当てることで、その歴史を立体的に提示し、ご覧になられた学内外の方々に、本金沢大学の伝統を実感してもらえるのではないかと思います。

また、歴史は、ただ振り返るだけではなく、その立ち位置を確認し、これからの未来がどうあるべきかを考えるためにあるともいわれます。今回の展示もただ伝統を実感するだけでなく、金沢大学の未来に向けての側面がなければならないでしょう。そこで、最後のコーナーでは、金沢大学の将来を展望するものとして研究に焦点を絞り、新たなる地平を「創造」する姿にスポットをあててみました。これらを通して、来館された皆様に金沢大学の過去・現在・未来を体感してもらえれば、幸いです。

最後に、本展示は学内外の多くの皆様のご協力により実現いたしました。ここに厚く御礼申し上げます。

2012年10月

金沢大学資料館長　古畑　徹

CONTENTS

ごあいさつ …… P 1

1. 金沢大学創基150年事業 …… P 2
小さなものの力　柴田正良
記念事業の概要／記念クリアファイルの原図

2. 金沢大学の源流（1862〜1889） …… P 4
加賀藩種痘所／卯辰山養生所／金沢医学館／啓明学校・石川県中学師範学校／
石川県専門学校／別伝習所・石川県集成学校／石川県女子師範学校／黒川良安／
津田淳三／大田美農里／田中信吾／スロイス／ホルトルマン

3. 前身校の伝統（1890〜1949） …… P 7
①第四高等学校と4つのエピソード
エピソード１：北條時敬と西田幾多郎　古畑　徹
エピソード２：河合良成・正力松太郎と南下軍　井上好人
コラム：コマツの発展と河合良成
エピソード３：中野重治と『北辰会雑誌』　古畑　徹
エピソード４：谷口吉郎・土川元夫と明治村　中野裕子
〜もしも四高同窓会がなかったら〜
コラム：明治村に残されている四高の建物

②医大・薬専・工専・師範・高師・青師の伝統
金沢医学専門学校・金沢医科大学／金沢医科大学附属薬学専門部／
金沢高等工業学校・金沢工業専門学校／石川師範学校／金沢高等師範学校／
石川青年師範学校／高安右人／浅野三千三／塩野直道

4. 金沢大学の発展と「創造」力（1949〜2012） …… P 16
主要キャンパスの変遷／創基150年記念 学長特別講義「金沢大学―伝統と創造―」／
金沢大学の研究力／研究を支えてきたモノたち

創基150年略年表 …… P 19

出品資料目録 …… P 20

小さなものの力

（創基150年記念事業をほぼ終えて）

柴田 正良

創基150年記念事業
準備委員会委員長

「静かに、そして粛々と」という言葉だったかどうかはもはや自信がないが、およそ4年前に、中村信一学長から創基150年記念事業のイメージを伺ったときは、巷に花火のごとく打ち上がるこの種の多くの記念事業とは趣を異にしていることに、少し安心したものだった。そのとき「これだけは」と学長から示された大きな事業は、彦三種痘所の記念碑建立、150年史の刊行、記念式典の挙行の3つだけだった。その後、新制金沢大学発足の記念碑を金沢城公園内に設置する事業と、準備委員会発案による「アジア5大学学長フォーラム」の開催が加わったとはいえ、記念事業全体は一貫してシンプルで、控え目なものだったと言えよう。

そういうわけで、記念事業のシンボルマークの制定や「先魁・共存・創造」というコンセプトの設定といった準備作業を進めていくなかで、私には、この事業の真の意義が「大きなもの」の誇示にあるのではなく、「小さなもの」の力の結集にあるように思われてきた。それは具体的には、できるだけ多くの本学関係者に、できるだけ様々な場面で、この事業に関与してもらうということであった。意外に思われるかもしれないが、私には、「学長フォーラム」のような巨大なイベントより、現時点で28テーマを数える「自主企画」や60回を超す「講演会・シンポジウム」シリーズの方がある意味で貴重であり、また「学長フォーラム」をとってみても、華々しいパフォーマンスより、それぞれの持ち場で重ねられた準備の一つ一つの方が主役であるように思われた。

そもそも大学の歴史を振り返り、未来に思いを馳せることにどんな意味があるのだろう。それは、言わずもがなのイベントを無事に完遂することより、その実行を通して、できるだけ多くの関係者が社会における大学の位置と、大学における自分の位置を素直に確かめることにあるのではないか。しかし、その意味で本事業は、どれほどの成果を上げたのか。大方の叱正を待つばかりである。

「過去を再び思い出すことは、未来を確かなものにしようとするための方法なのであった」（A.R.ルリア『失われた世界』海鳴社、p.117）。戦争で脳に弾丸を受け、ほとんどすべての記憶を失った患者は、私たちより遙かに深い位置で、遙かに絶望しながら、自分が何であるかを必死に取り戻そうとしている。そうだ、金沢大学が何であるかは、誰にとっても、すでに与えられたものなのではなく、常に創り上げていくべきものなのだ。

平成24年9月10日

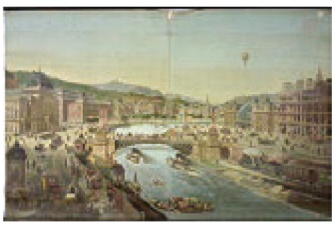
記念事業の概要

金沢大学創基150年記念事業は、「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」という本学のアイデンティティを具体的な姿において確立することをめざした事業です。金沢大学とはこれまで何であったのか、いま何であるのか、そしてこれから何であろうとするのか、ということを「先魁」「共存」「創造」の3つのキーコンセプトのもとに国内外に向けて発信します。

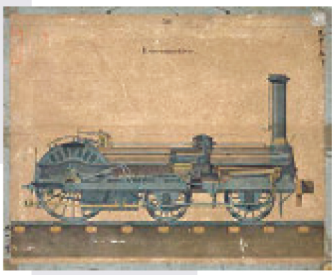
主な事業としては、記念シンボルマークの作成（2009年6-8月）、石碑「金沢大学誕生の地」設置及び除幕式の実施（2010年11月6日）、石碑「金沢大学発祥の地」設置及び除幕式の実施（2011年11月5日）、「アジア５大学学長フォーラムin金沢」の開催（2011年11月12日）、「アジア学生フォーラム in 金沢」の開催（2011年11月13日）、『金沢大学創基150年史』の刊行（2012年5月30日）、「金沢大学創基150年記念式典・記念講演・記念祝賀会」の挙行（2012年5月30日）などが行われ、これからも『創基150年史』の英語版の刊行が予定されています。このほかにも公募をした自主企画や4年間で60回以上にものぼる「講演会・シンポジウム」シリーズの開催、学生ボランティアグループの活動、記念グッズの作成などが行われました。

記念クリアファイルの原図

記念グッズの一つとして作成された記念クリアファイル「金沢大学所蔵　金沢大学の前身校で用いられた金大教育掛図シリーズから」は８種（創基150年のロゴ入りファイルを入れると９種類）あり、創基150年記念式典で出席者に配られました。本特別展ではその原図を展示します。



ヘルツェル外国語教育用掛図　町



モラン機械掛図第30図　蒸気機関車

地質一覧　第一

ヘルツェル外国語教育用掛図　町

発行元：ウィーン・E.D.ヘルツェル、1890年ごろ。「第四高等学校図書」の印記あり。外側には「ヘルチエル独逸語示教図　共七　市街之部」の墨書あり。同じ掛図が2つあり、１つは図書室、１つは英語部の所蔵。旧図書室蔵のものは1900（明治33）年4月23日登録。90.5×140cm。

モラン機械掛図第30図　蒸気機関車

編著者：A.J.モラン、発行：パリ・アシェット社、1856年。同じ掛図は3つあり、いずれにも「第四高等中学校図書」の印記あり。45.8×57.6㎝。

ハバード周期律表

編著者：H.D.ハバード、発行元：シカゴ・W.M.ウェルチ、1925年。「第四高等学校図書」の印記あり。1926（大正15）年１月21日登録。103.9×148cm。

人体生理図第一　骨格

著編者：ジョン・マーシャル、発行元：辻謙之介・阪上半七、1884（明治17）年。破損している上部の内題に「人体生理図第一／英国倫頓大学校外科教授　学士会院会員医博士存麻紗著／日本東京大学教授　正六位田口和美閲／日本東京師範学校教諭　理学士岩川友太郎校／日本医学士西郷吉義訳」とある。ロンドンで1870年に発行された原図を翻訳して刊行したもの。

ロビンソン動物掛図第2図　鳥類

著編者：F.ロビンソン、発行元：ロンドン・Ed.スタンフォード、1855年。「第四高等中学校図書」の印記あり。84.5×59.6cm。

地質一覧　第一

著編者：和田維四郎、発行元：文部省編輯局、1882（明治15）年。「文部省」「石川県専門学校印」の印記あり。73.5×55.2cm。和田維四郎（わだ・つなしろう、1856-1920）は若狭出身の地質学者。東京大学教授を経て1882年に農商務省地質研究所初代所長。絵は狩野良信（かのう・よしのぶ、1848-？）。日本画家で文部省に勤務していた。73.5×55.2cm。

蜀丞相諸葛武侯祠堂碑拓本

中国四川省成都の武侯祠にある碑の拓本。建立は809（元和4）年。撰者は裴度（765-836、唐の宰相）、書は柳公綽（762-830。唐の政治家・書家）。武侯は三国・蜀の宰相・諸葛亮（字は孔明）のこと。「第四高等学校図書」の印記あり。1931（昭和6）年四高同窓会会長より寄贈。269×137.7cm。

加賀藩年中行事図絵　犀川大橋

作者：巌如春、1932年。石川県女子師範学校が文部省から支給された郷土研究施設費で、金沢の風俗画家・巌如春（1868-1940）に依頼して製作したもの。巌如春は、加賀藩の故事に精通し、その絵は正確な時代考証に基づいている。

2 金沢大学の源流（1862～1889）

金沢大学の源流には、3つの大きな流れがあります。金沢大学の創基として位置付けられる1862（文久2）年の加賀藩彦三種痘所の開設に始まり、金沢医科大学及び同附属薬学専門部へと伝えられた西洋医学・薬学教育の流れ、幕末期加賀藩における洋学教育の伝統を受け継いだ明治初期の語学学校を嚆矢として第四高等学校へと発展した中等教育・高等専門教育の流れ、1873（明治6）年の石川県による別伝習所の設置に始まり石川師範学校へとつづく師範教育の流れ、の３つです。以下、主な源流（校）を紹介します。

◇加賀藩種痘所 ―金沢大学の創基 1862（文久2）～1867（慶応3）

金沢に種痘の種苗が伝えられたのは1850（嘉永3）年。その後、津田淳三ら蘭方医たちによって私設種痘所が作られて種痘の普及が図られた。1862（文久2）年3月、加賀藩は黒川良安らに金沢彦三八番丁の反求舎なる建物を付与して種痘所とすることを公認した。これがいわゆる「加賀藩彦三種痘所」の開設である。この種痘所に参画した医師は25名。彼らの間では接種技術などの医学教育も行われ、それゆえにこれをもって金沢大学の創基とする。これを機に種痘は大いに普及。種痘所も南町に移転し、藩直轄となった。

◇卯辰山養生所 ―1867（慶応3）～1870（明治3）

福沢諭吉の『西洋事情』を読んで触発された加賀藩主前田慶寧は、卯辰山に貧民救済病院建設を計画した。病院は1867（慶応3）年10月に完成、養生所と名付けられた。加賀藩は種痘所をここに移すとともに、黒川、津田、田中信吾、大田美農里を棟取、高峰元稙（のち精一、高峰譲吉の父）を舎密局総理に任命して、貧民の救療と医学の研究・教育にあたらせた。

◇金沢医学館 ―1870（明治3）～1873（明治6）

前田慶寧は黒川を長崎に派遣して医学校と病院の制度調査を行わせ、1870（明治3）年2月に養生所から医育機関を大手町の旧津田玄蕃邸に移して、金沢医学館を開設した。創立当初の教師は黒川らであったが、71年、オランダ軍医スロイスを雇い入れ、本格的な西洋医学の教育と治療を始めた。しかし、廃藩置県により藩立医学館は72年に閉鎖。津田・大田・田中らは県に請願して建物・機器を借り、私財を投じて私立医学館を維持した。

◇啓明学校・石川県中学師範学校 ―1876（明治9）～1881（明治14）

中学教員の養成が緊急課題となった1875（明治8）年、政府は東京師範学校に中学師範学校を付設した。石川県はこれをただちに調査。76年2月、英学校と石川県中学校を廃止して中学師範学校を設立、校名を啓明学校とし、翌年、石川県中学師範学校と改称した。これは東京以外にできた、全国唯一の中学師範学校であった。

◇石川県専門学校 ―1881（明治14）～1888（明治21）

石川県において中学設置は一向に進まず、中学師範学校は専門教育への転換に踏み切る。1880（明治13）年より教科の再編成をすすめ、翌年7月、専門教育を目的とし、予備科と法・理・文の３学科を有する石川県専門学校に改制した。87年10月開校の第四高等中学校はこの土台のもとに設置され、その資産を引き継いだ。

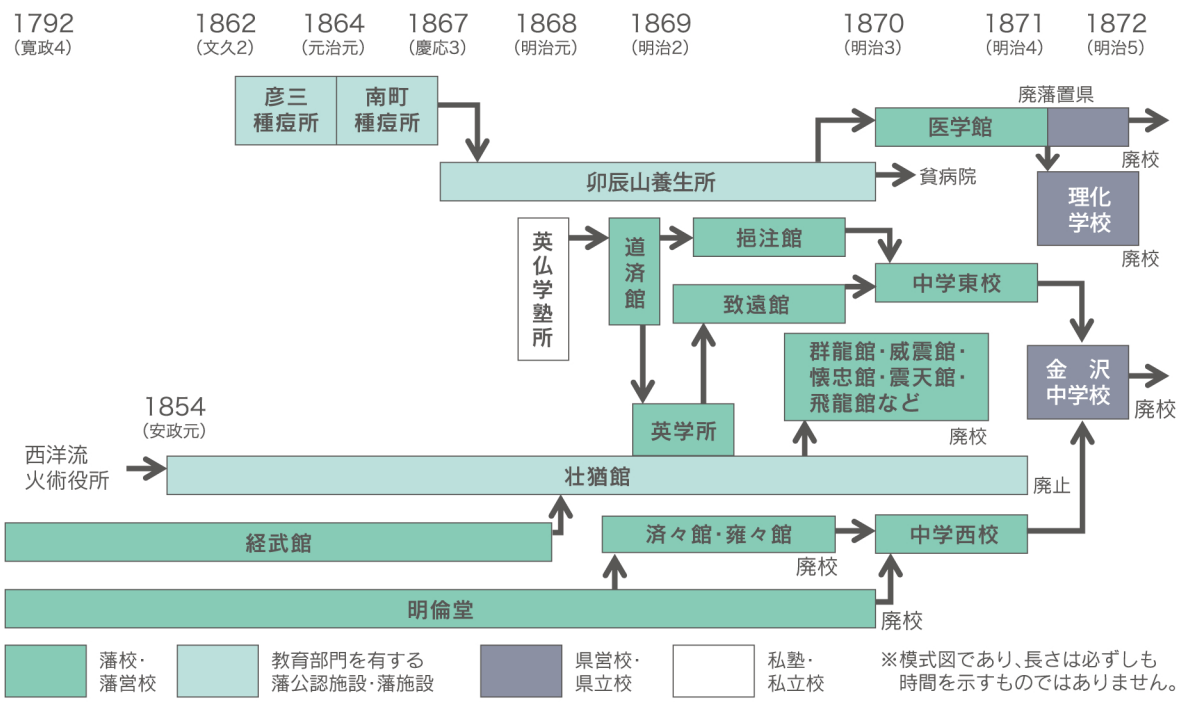
◇別伝習所・石川県集成学校 ―1873（明治6）年～1874（明治7）年

1873（明治6）年12月、石川県は小学教員養成のために別伝習所を開設し、小学校上級生のうちの優等な者を選んで生徒とした。これが石川県における師範教育の始まりである。県は同時に、官立東京師範学校の規則を調査し、それに基づく教則を作り、74年8月、石川県集成学校を開校。別伝習所の生徒はここに移って小学生教授法を学んだ。しかし文部省の学事視察で校名にクレームが付けられ、同年11月、県は急遽、校名を石川県師範学校に改めた。

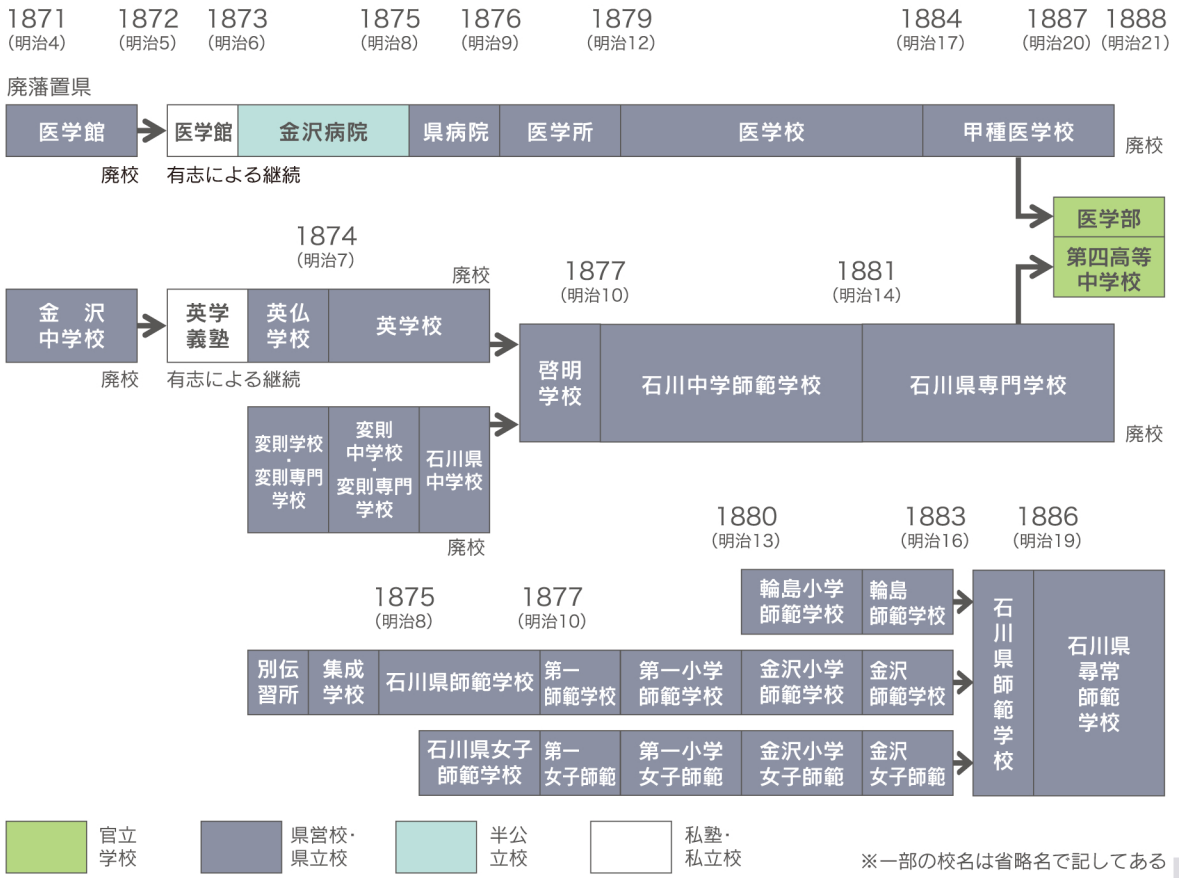
◇石川県女子師範学校 ―1875（明治8）年～1877（明治10）年

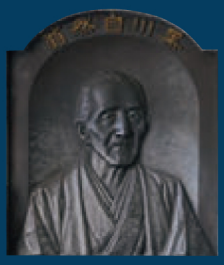
1875（明治8）年、石川県は幼児教育者の養成を目指して、公立松原町女児小学校内（現、大谷廟所）に石川県女子師範学校を創設した。女子師範の創設は、官立東京女子師範学校に次ぐもので、府県立としては最初であった。

◆幕末・明治初期における加賀藩校の変遷



◆明治初期における前身校の変遷（廃藩置県～明治20年ごろ）





くろかわ・まさやす

黒川 良安

略年譜

1817(文化14)年　越中国新川郡黒川村(現・富山県上市町)に生まれる。
1828(文政11)年　父玄龍の長崎留学に同行し、シーボルトの通訳吉雄権之助について蘭学を学ぶ
1840(天保11)年　長崎からの帰路、金沢にて加賀藩執政青山将監に召抱えられる
1841(天保12)年　江戸遊学。坪井信道の日習塾に入塾して塾頭となる
1846(弘化3)年　金沢に戻り加賀藩侍医となる
1850(嘉永3)年　金沢で初めて種痘を行う
1852(嘉永5)年　藩命により河北潟魚類死滅事件を調査。日本初の水質調査。
1854(安政元)年　壮猶館の翻訳方を兼務
1862(文久2)年　加賀藩彦三種痘所の棟取を兼務
1868(明治元)年　藩主の命により長崎にて医学校・病院制度を調査
1869(明治2)年　医学館総督医となる
1871(明治4)年　廃藩置県で主君前田慶寧が金沢を去ると、職を辞す
1890(明治23)年　東京本郷真砂町にて逝去

つだ・じゅんぞう

津田 淳三

略年譜

1827(文政10)年　金沢東馬場町(現・東山三丁目)に生まれる。
1842(天保13)年　藩医津田昌渓の養嗣となる
1849(嘉永2)年　大坂の緒方洪庵の適々塾に入門
1854(安政元)年　壮猶館の軍器取調兼蘭書翻訳方となる
1855(安政2)年　金沢堤町に私立の種痘所を開設
1862(文久2)年　加賀藩彦三種痘所の開設に参画
1867(慶応3)年　卯辰山養生所開設によりその棟取となる
1869(明治2)年　医学館開設により同館教師となる
1871(明治4)年　廃藩置県で医学館が閉鎖されると、大田美農里・田中信吾とともに私財を投じて維持を図る。翌年、県の補助が得られる。
1875(明治8)年　石川県病院主務医となる
1876(明治9)年　引退
1879(明治12)年　逝去

おおた・みのり

大田美農里

略年譜

1831(天保2)年　金沢に生まれる。加賀藩老臣村井家の侍医の家柄。
1850(嘉永3)年　大坂の緒方洪庵の適々塾に入門し、推されて塾監となる。
1853(嘉永6)年　ペリー浦賀来航。これに危機感を覚え、江戸に出て和蘭兵学者手塚律蔵に造船兵学を学ぶも、脚気のため帰郷。
1857(安政4)年　藩命により壮猶館の蘭書翻訳校正方なる
1866(慶応2)年　壮猶館医学教授
1867(慶応3)年　卯辰山養生所開設によりその棟取となる
1870(明治3)年　医学館開設により同館教師となる
1871(明治4)年　廃藩置県で医学館が閉鎖されると、津田淳三・田中信吾とともに私財を投じて維持を図る。翌年、県の補助が得られる。
1875(明治8)年　石川県病院主務医となる. 翌年、石川県病院長
1880(明治13)年　老齢を理由に辞任
1884(明治17)年　金沢医師会長
1896(明治29)年　藍綬褒章受章
1909(明治42)年　逝去

たなか・しんご

田中 信吾

略年譜

1837(天保8)年　小松の漢学者湯浅家に生まれる。長じて田中謹斎の養子となる。
1856(安政3)年　大坂の緒方洪庵の適々塾に入門。
1862(文久2)年　帰郷し、藩命で藩艦発揮丸船医となる
1865(慶応元)年　加賀藩医学教師となり、壮猶館医書翻訳校正方を兼任
1867(慶応3)年　卯辰山養生所開設によりその棟取となる
1870(明治3)年　医学館開設により同館教師となる
1871(明治4)年　廃藩置県で医学館が閉鎖されると、津田淳三・大田美農里とともに私財を投じて維持を図る。翌年、県の補助が得られる。
1875(明治8)年　石川県病院主務医となる. 翌年、金沢医学所長。
1879(明治12)年　金沢医学校長兼金沢病院御用掛となり、学事調査のため上京
1880(明治13)年　金沢病院長を兼務
1884(明治17)年　石川県甲種医学校長になるも、同年辞任
1885(明治18)年　翌年、金沢における最初の私立病院となる尾山病院を開院
1900(明治33)年　逝去

Pieter Jacob Adrian Sluys

P. J. A. スロイス

略年譜

1833年　オランダのシュテンベルゲンに生まれる。ライデン大学からユトレヒト軍医学校へ進み、陸軍1等軍医となる
1869(明治2)年　加賀藩よりオランダ人医師探しで欧州に派遣されていた伍堂卓爾らとアムステルダムで会い、金沢赴任の契約を結ぶ
1871(明治4)年　新婚の夫人を伴って横浜に到着し、4月金沢着任。金沢医学館にてオランダ医学を系統的かつ広範に教授し、患者の治療にも携わる。
1874(明治7)年　任期満了により帰国
1913年　逝去

Adrian C. Holterman

A. C. ホルトルマン

略年譜

1844年　オランダ生まれ。アムステルダムのクリニカルスクールで医学を学ぶ。
1867年　オランダ医師国家試験に合格。
1875(明治8)年　スロイスの後任として、金沢医学館に着任。スロイスのやり残した科目の講義と診療を行った。その後、金沢医学所・金沢病院でも教育と診療を担当
1878(明治11)年　明治天皇、金沢医学所に行幸。ホルトルマンの指導による医学生の患者診察を見学。
1879(明治12)年　新潟医学校に移る
1880(明治13)年　オランダ帰国
没年不詳

3 前身校の伝統（1890～1949）

1949（昭和24）年に金沢大学に統合された前身校は、金沢医科大学、第四高等学校（四高）、金沢工業専門学校（工専）、石川師範学校、金沢高等師範学校（高師）、石川青年師範学校（青師）の6校、もしくはこれに金沢医科大学附属薬学専門部（薬専）を入れて7校と数えます。この7校のうち、金沢医科大学・同附属薬専は幕末からの医学・薬学教育の伝統を、四高は幕末の各種藩校・明治初期の各種県立学校からの中等教育・高等専門教育の伝統を、石川師範学校は明治初期からの師範教育の伝統を、それぞれに引き、統合までに80年以上の歴史を刻みました。

これに対し、金沢工専、金沢高師、石川青師は、それぞれ時代の要請のなかで、大正期あるいは戦中期に生まれた新しい学校です。そのため歴史も浅く、最も古い金沢工専でも統合までに30年弱の歴史しかありませんが、そこから育った人材は少なくなく、また金沢大学のさまざまな分野の礎として重要な意味を持っています。

ここでは、前身校のなかでも最も著名で多くの人材を輩出してきた四高のエピソードに一つのスポットを、あまり知られていない他の前身各校の歩みにもう一つのスポットをあてて、その歴史の深さを紹介します。

1 第四高等学校と4つのエピソード

旧制第四高等学校の歴史は、1887（明治20）年の第四高等中学校の金沢設置に始まる。前年公布の「中学校令」で全国に5つの高等中学校の設置が定められると、石川県は官民を挙げて熱心な誘致運動を行い、その誘致に成功した。校舎はそれまでの県の最高学府・石川県専門学校を借り、教員の多くもここから移り、また生徒の97％までがここから入試に応じて合格した者であった。ただ、初代校長に薩摩出身の柏田盛文がなったこともあり、学校騒動は絶えず、学内には騒然たる雰囲気があった。

1894（明治27）年、「高等学校令」により第四高等学校と改称したが、依然この雰囲気は消えなかった。これを大きく変えたのが金沢出身の第五代校長・北條時敬である。彼によって綱紀粛正・校風改革が断行され、学業精進の環境整備がなされた。北條の転任後も生徒自身による校風刷新運動が展開され、明治40年前後に四高の校風を代表する「超然主義」が誕生する。こうした流れは、第七代校長・溝渕進馬の時代に四高の最盛期と呼ばれている時代を現出する。1920年代に入ると、時流に媚びない「超然」の思想は社会批判とも結びつき、社会科学研究会を中心に社会主義的色彩を帯びた学生運動が盛んになる。『北辰会雑誌』が中野重治らの編集により全盛の時代を迎えた背景には、こうした雰囲気が存在した。1930年代になると、学生運動は弾圧され、四高の軍事化も進んだが、自治の校風と相容れず、学校当局と学生との間で多くの対立事件も起きた。

以下、こうした四高の歴史を4つのエピソードでたどってみる。

明治末期の第四高等学校（1910（明治 43） 年卒業アルバムより）

第四高等中学校・第四高等学校歴代校長一覧

校名	代数	校長名	在職期間
第四高等中学校	初代	柏田　義文	1887（明治20）年 9月 ～1891（明治24）年10月
	2代	中川　　元	1891（明治24）年10月～1893（明治26）年9月
	3代	大島　誠治	1893（明治26）年9月　～1894（明治27）年8月
第四高等学校			1894（明治27）年8月　～1897（明治30）年2月
	4代	川上　彦次	1897（明治30）年2月　～1898（明治31）年1月
	5代	北條　時敬	1898（明治31）年1月　～1902（明治35）年5月
	6代	吉村寅太郎	1902（明治35）年5月　～1911（明治44）年8月
	7代	溝淵　進馬	1911（明治44）年8月　～1921（大正10）年11月
	8代	武藤　虎太	1921（大正10）年11月～1931（昭和6）年1月
	9代	小松　倍一	1931（昭和6）年1月　～1937（昭和12）年8月
	10代	菰田万一郎	1937（昭和12）年8月　～1939（昭和14）年3月
	11代	岡上　　梁	1939（昭和14）年4月　～1943（昭和18）年9月
	12代	石井　忠純	1943（昭和18）年9月　～1946（昭和21）年3月
	13代	鳥山　喜一	1946（昭和21）年3月　～1949（昭和24）年7月
	14代	伊藤　武雄	1949（昭和24）年7月　～1950（昭和25）年3月

エピソード1 ： 北條時敬と西田幾多郎

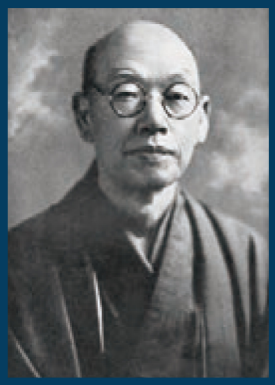
学校騒動の絶えなかった四高の雰囲気を大きく刷新し、その伝統の基礎を固めたのは、第5代校長・北條時敬だといわれている。北條が行った改革は、教員・生徒に対する綱紀粛正に始まり、秋季運動会及び部活動の奨励、「三々塾」をはじめとする公認下宿の設置、禁酒令など、厳しい鍛練と自覚覚醒のもとに四高の意義と存在感をうち立てようとしたものであった。こうした改革に取り組んでいた北條が、1899(明治32)年10月の伊藤博文の来学前に書簡を送り、世に広く知られた伊藤の花街豪遊を事前に戒めた話は有名である。

北條は四高改革を進めるに当たり、前任の山口高等学校から彼を慕う教員数名を転任させ、改革の協力者とした。そうした教員の一人が、のちに日本を代表する哲学者となる西田幾多郎である。西田と北條の師弟関係は、西田が石川県専門学校に入学した1886(明治19)年にはじまる。第四高等中学校ができると、北條はその教諭となり、西田も編入したが、この頃西田は北條の家に寄寓するなどして親しく交わり、大いに北條から人格的感化を受けたといわれる。しかし、北條はほどなく退職して帝国大学大学院に進み、残された西田は学校との確執を深め1890年に退学した。その後西田は、帝国大学文科大学哲学科選科に入学し、修了後、石川県尋常中学七尾分校主任を経て1896年第四高等学校講師嘱託となる。この頃北條は、山口高等学校長に任命されていたが、西田に声をかけ、山口に呼び寄せ教務嘱託(のち教授昇任)とした。そして山口から金沢に転出した北條の求めに応じて、1899年西田はふたたび四高に教授として戻るのである。

学校が民家を借り上げて生徒が共同生活を営み、教員がそれに関与していくという公認下宿(塾)制度の嚆矢となる「三々塾」は、北條が西田らに働きかけて作り、四高改革の中心に据えようとしたものである。

西田の北條への敬愛は一生続き、北條の死去に際しては、その遺徳を慕ってその遺文を編纂した『廓堂片影』(教育研究会、1931年)の編者となっている。ただし、実質の編纂者は武蔵高等学校校長を務めた教育者・山本良吉である。山本も北條の石川県専門学校時代からの弟子であり、西田のよき友であった。なお、「郭堂」は北條の号であり、「片影」とはわずかな影、姿の一部分の意味である。北條を慕った弟子たちの、この書物だけでは北條のすべては語りつくせないという思いが込められたタイトルではないだろうか。

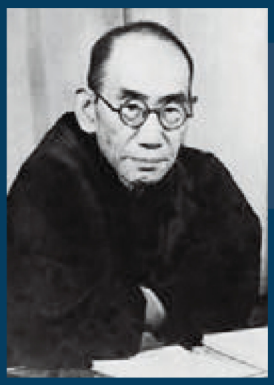
金沢大学資料館長　古畑　徹



北條 時敬　ほうじょう・ときゆき

略年譜

1858(安政3)年	金沢に生まれる。
1873(明治6)年	英仏学校に入学。翌年英学校と改名後も在学
1876(明治9)年	啓明学校に入学
1881(明治14)年	東京大学理学部数学科に入学
1885(明治18)年	東京大学卒業。石川県専門学校教諭となる
1888(明治21)年	第四高等中学校教諭となる。 退職し東京大学大学院に入学
1894(明治27)年	山口高等学校教頭。翌々年、校長となる
1898(明治31)年	第四高等学校校長となる
1902(明治35)年	広島高等師範学校が開校し、初代校長となる
1913(大正2)年	東北帝国大学総長となる
1917(大正6)年	学習院院長となる
1920(大正9)年	宮中顧問官 貴族院議員に選ばれる
1929(昭和4)年	逝去



西田幾多郎　にしだ・きたろう

略年譜

1870(明治3)年	石川県河北郡森村(現・石川県かほく市)に生まれる
1883(明治16)年	石川県師範学校入学(1884年卒業)
1886(明治19)年	石川県専門学校入学
1887(明治20)年	第四高等中学校予科に編入学(1888年本科進学)
1890(明治23)年	第四高等中学校中退
1891(明治24)年	帝国大学文科大学哲学科選科に入学(1894年修了)
1896(明治29)年	第四高等中学校講師嘱託となる
1897(明治30)年	山口高等中学校教務嘱託となる(1899教授昇任)
1899(明治32)年	第四高等学校教授に転任
1909(明治42)年	学習院教授に転出
1910(明治43)年	京都帝国大学文科大学助教授となる (1913教授、1928停年退官)
1911(明治44)年	『善の研究』出版
1927(昭和2)年	帝国学士院会員
1940(昭和15)年	文化勲章受章
1945(昭和20)年	逝去

エピソード2 ： 河合良成・正力松太郎と南下軍

「学生」という新たなカテゴリーが形成されつつあった近代日本にあって、それに相応しいアイデンティティとは何かを問い、苦悩し、奮闘したのが明治30年代後半から始まる四高の校風改革運動でした。

河合良成は、そのリーダーとして“超然主義”へと連なる伝統の礎を築き、四高を全国の旧制高校に並び立たせた立役者です。彼が「校風」に対する彼自身の思いを公表したのは、1年生だった1905（明治38）年春（当時は秋入学なので入学年は1904（明治37）年）に『北辰會雑誌』上に、学生の活気の無さを批判する記事を投稿したのが最初でした。それ以後、彼は四高の中心的イデオローグとして校風改革運動の急先鋒に立っていきます。「優良な一インテリ学生が2年生、3年生には校風刷新運動の先鋒であり、『北辰會雑誌』の誌上や演説会などにおける煽動者であり、鉄拳制裁の指導者でもあり、さらに発展して南下軍の代表者でもあった」と、自叙伝で回顧されているとおり、河合は同郷の盟友・正力松太郎と共に縦横無尽の活躍をします。

当初は、時習寮の寄宿舎改革を目指しますがうまくゆかず、残された在学期間を運動部による対外試合へと方針転換します。これが「南下軍」～三高（京都）と六高（岡山）との対抗戦のために京都へ赴いた選手団～です。その目的は運動部の活力喚起、四高生全体の気質発揚、そしていずれ帝大で同級となる学生同士の親睦であると謳われました。

ところで、「南下軍」のように、運動部の対外試合が校風振興のために意義ある、という見解は、河合のオリジナルなものではなく、第一高等学校（一高）で明治20年代の終わり頃から始められており、当時にあっては多くが諒解するところとなっていたようです。というのも、彼らは相互に校友会誌を交換して、誌上での謂わば“情報ネットワーク”を形成していたからです。一高の校風論や寄宿舎改革の情報もリアルタイムで入手されていました。一高を「準拠集団（reference group）」として憧れる地方の学生にとって、とりわけ河合のようなイデオローグにとって、このネットワークの影響は大きかったといわざるをえません。この情報は、彼らの心情を刺激し、意志決定や行動のモデルとして「予期的社会化（anticipatory socialization）」を行っていたと考えられるからです。

実は、私たちの“記憶”に残されている「南下軍」には、先輩世代が1901（明治34）年春に実施した先例があり、河合・正力コンビによるものはその再興として練られたということも知っておきたいものです。河合世代による「南下軍」は、1907（明治40）年3月に実施され、野球・庭球・剣道・柔道の各運動部と応援団の総勢200名が参加しました。支援のために、弁論部による壮行演説会や後援会による寄付金募集があり、また、応援歌である「南下軍の歌」も作られました。出発の前日、選手団が講堂に結集し、マネージャーである河合と正力を中心に水杯が酌み交わされ、試合に敗れたら髪を切って坊主になるとも誓い合いました。

ところが、第1戦の野球と第2戦の撃剣に敗れてしまいます。第3戦の柔道は「今や南下軍が一縷の望をつなぎしもの、この一戦のみ」といった状況で行われました。このときの正力の超人的な活躍譚が喧伝され、彼が金沢市中のヒーローとなるわけです。

さて、各々17人対抗の紅白勝負は四高優位ですすめられ、四高側は7人を残して三高の大将・小島を引っ張り出します。小島は「名にし負う柔道界の名手」としてその名を轟かせていた選手で、そんな強豪・小島に、三将を務めていた正力松太郎が挑みます。正力は「つと寄りて、むづと組」みに行き、両雄、虎躍龍騰して互いに秘術を尽くして攻めあいます。だが決着は意外に早くつきます。正力が巴投げをうち、小島が「やつしまつた」と絶叫したときにはすでに正力は小島を押込んでいました。1分20秒のドラマでした。「南下軍」の溜飲を大いに下げ、四高の伝統に華のある1ページを刻んだ瞬間でした。

金沢星稜大学教授　井上 好人

河合 良成　かわい・よしなり

略年譜

1886(明治19)年　富山県福光に生まれる。
1904(明治37)年　高岡中学(現・高岡高校)から第四高等学校入学。「三々塾」に入る
1907(明治40)年　三高との対抗試合のため南下軍を組織。東京帝国大学法学部入学
1911(明治44)年　東京帝国大学を卒業し、農商務省入省
1919(大正8)年　米騒動の責任を取って退官。東京株式取引所に入社し常務理事となる
1920(大正9)年　東京帝国大学経済学部にて取引所論を講義。以後、15年間つづく。
1934(昭和9)年　帝人事件により逮捕される。3年後、裁判により無罪。
1942(昭和17)年　東京市助役
1946(昭和21)年　第1次吉田内閣で厚生大臣
1947(昭和22)年　公職追放となり厚生大臣辞任。小松製作所相談役、ついで社長に就任
1952(昭和27)年　衆議院議員当選
1962(昭和37)年　財団法人日本花の会設立。経済使節団長としてソ連訪問
1964(昭和39)年　小松製作所会長に就任
1970(昭和45)年　逝去

NO IMAGE

正力松太郎　しょうりき・まつたろう

略年譜

1885(明治18)年　富山県射水郡枇杷首村(現・射水市)に生まれる
1904(明治37)年　高岡中学(現・高岡高校)から第四高等学校入学。柔道部入部
1907(明治40)年　柔道戦で三高に勝利し、金沢市中のヒーローとなる。東京帝国大学法学部入学
1913(大正2)年　警察庁入庁
1923(大正12)年　関東大震災発生。警視庁官房主事として事態に対処。警務部長となる。摂政宮(のちの昭和天皇)狙撃事件(虎の門事件)発生
1924(大正13)年　懲戒免職。読売新聞を買収し、社長就任
1934(昭和9)年　大リーグ選抜チームを招聘し、巨人軍創設
1945(昭和20)年　A級戦犯として巣鴨刑務所に収監。2年後、不起訴。
1952(昭和27)年　日本テレビを設立し、社長となる
1955(昭和30)年　衆議院議員当選、北海道開発庁長官として初入閣
1956(昭和31)年　原子力委員会初代委員長、ついで初代科学技術庁長官
1958(昭和33)年　読売新聞社主に復帰。読売テレビ放送会長就任
1969(昭和44)年　逝去

コラム　コマツの発展と河合良成

小松製作所(現・コマツ)第3代社長・河合良成は、コマツ中興の祖といわれる。戦後、労働組合結成が認められると、当時の混乱した情勢と相まって、全国各地で労働争議が多発した。1947(昭和22)年7月にはじまった小松製作所の経済闘争は、それを指導した日本共産党の当時の革命路線により「百日闘争」とよばれる泥沼の長期闘争になっていった。窮した経営陣は、旧知の間柄であった元厚生大臣・河合良成に事態の収拾を依頼。河合は相談役の肩書で組合側と折衝し、復興金融公庫の融資確約を背景に小松製作所再建への協力を求め、争議解決に成功する。経営陣は河合に社長就任を求め、河合は固辞したが、復興金融公庫もそれを望んだことから、社長を引き受けることとなった。

河合の社長時代、コマツはその技術力を高めて世界的な企業へと飛躍していくが、そのきっかけとなったのが、世界最大のブルドーザーメーカー、キャタピラー・トラクター(CAT)社の日本進出であった。1961年、CAT社は三菱重工業と合弁で日本にブルドーザーメーカーを設立する計画を発表した。当時、CAT社とコマツの技術力の差は歴然としており、ブルドーザーを主力商品としていたコマツにとって、この事態は存亡の危機であった。これに対し河合以下コマツ首脳部は、QC(品質管理)手法を導入して短期間で品質を飛躍的に向上させる手に出る。「マルA対策」と銘打ち、コスト度外視で開発を進め、その最前線となったコマツ粟津工場では「ねじ1本から見直す」徹底した改良が始まった。96台もの実験車を試作し、部品の比較、耐久テストを繰り返した。その結果、1963年9月には量産車第1弾として「D50A−11スーパー」等の機種を市場に導入できた。合弁会社キャタピラー三菱が最初の製品を発売する1年半も前のことである。

マルA対策のテスト車を視察する河合社長

こうして世界に通用する技術力を手に入れたコマツは、1967年、CAT社の本拠地・アメリカに進出し、河合が亡くなる1970年には小松アメリカ(株)の設立にまで至るのである。

エピソード3 ： 中野重治と『北辰会雑誌』

四高は多くの著名人を輩出しているが、なぜか政治家・実業家よりも作家や学者といった文化人の方が目に付く。特に作家・文学者と呼ばれる人々の多さには目を見張るものがあるが、彼らのなかには四高時代から同人誌等に作品を発表していた者も少なくない。そうした彼らの発表の場の一つが、四高の学友会（北辰会）誌である『北辰会雑誌』であった。これは1885（明治28）年に創刊され、1940（昭和15）年に北辰会が北辰報国団に改編されるまで、147号を発行した。その後は『北辰』と改名して号数を受け継ぎ、四高が金沢大学に統合される1949年に158号を以て終刊した。『北辰会雑誌』の間は、雑誌部（のち文芸部に改称）が編集を担当し、それは学生たちの自主性に任されていた。

『北辰会雑誌』の最も充実した時期は大正後期とされるが、この時期に雑誌部に籍を置き、編集に作品発表にと活躍したのが、昭和を代表する作家・評論家・詩人として知られる中野重治である。中野は1919（大正8）年に四高文科乙類に入学。当時は共通選抜制という全国共通入試が行われており、そこで首席を取りながら一高ではなく四高に入ったといわれる。しかし、文学に覚醒した彼の成績は振るわず、二度の落第を経験して1924（大正13）年に卒業した。この間、県内の同人誌に「村田浩」のペンネームで作品を寄稿するとともに、『北辰会雑誌』には卒業するまでに短歌29首、詩4編、小説4編、訳詩6編などを発表、編集に当たってはその表紙デザインまで手掛けた。98号（大正12年12月）には彼が彫った鮮やかな2枚の木版画が表紙と中扉を飾っている。

中野が編集した『北辰会雑誌』で忘れてはならないのが、96号（大正12年3月）の「検閲」事件である。これは表紙に使われたマイヨールの彫刻「女体裸像」の写真が学校側に問題とされ、一旦配布されたものが回収されて、表紙絵なしで再発行されたという事件である。この時の様子は彼の代表作『歌のわかれ』にも描かれているが、回収されて現物がなかったため、この話は中野の創作と思われていた時期もある。現在は2冊の現存が確認されており、これを「マイヨール版」と通称している。

中野は2度の落第もあり、同期生が3倍いた。入学時同期に、佐々木直次郎（ポーの翻訳者）、高柳真三（法制史学者・東北大学法学部長）、西堀一三（『日本華道史』『日本茶道史』の著者）、大野林火（俳人）、中谷宇吉郎（物理学者・エッセイスト）らが、下級には窪川鶴次郎（評論家）、石堂清倫（社会運動家・思想家）、森山啓（作家）、岡良一（泉鏡花賞を創設した金沢市長）らがおり、大正デモクラシーと社会主義の波を受けた一つの時代がそこにあった。そしてその中心で彼らに大きな影響を与えたのが中野だったのである。

金沢大学資料館長　古畑　徹

左は「マイヨール版」、右は再発行された96号
（四高開学120周年記念イベントＨＰより）

中野 重治　なかの・しげはる

略年譜

1902（明治35）年　福井県坂井郡高椋村（現・福井県丸岡市）に生まれる
1914（大正3）年　県立福井中学（現・藤島高校）入学
1919（大正8）年　第四高等学校文科乙類入学
1924（大正13）年　第四高等学校卒業。東京帝国大学独逸文学科入学
1926（大正15）年　日本プロレタリア芸術連盟に参加し、中央委員。
1928（昭和3）年　全日本無産者芸術団体協議会（略称ナップ）の結成に参加。
1932（昭和7）年　治安維持法違反容疑で特別高等警察に検挙
1934（昭和9）年　共産主義運動から身を引くことを条件に出獄
1940（昭和15）年　小説集『歌のわかれ』出版
1945（昭和20）年　日本共産党に再入党。新日本文学会創立に参加
1947（昭和22）年　参議院議員（全国区、～1950）
1955（昭和30）年　『むらぎも』で毎日出版文化賞
1964（昭和39）年　日本共産党除名
1978（昭和53）年　朝日賞受賞
1979（昭和54）年　逝去

エピソード4 ： 谷口吉郎・土川元夫と明治村

～もしも四高同窓会がなかったら～

博物館明治村は1965（昭和40）年3月18日、愛知県犬山市の入鹿池の畔に開館しました。日本において本格的な野外博物館の嚆矢の一つに数えられる博物館明治村の歴史は、ともに大正14年に第四高等学校理科を卒業した建築家「谷口吉郎」と実業家「土川元夫」という2人の同窓生の協力によって紡ぎだされたものです。

明治村の構想が企図されたのは第2次世界大戦前に遡ります。その契機となったのが昭和15（1940）年、東京日比谷にあった鹿鳴館の取り壊しです。谷口は鹿鳴館がそっと誰にも知られないように取り壊され、跡には粗末なバラックが建てられたことを、省電（現在のJR山手線）の車窓に発見しました。「粗悪な建築と歴史的に重要な建築とが突然交換されてしまったということは、（中略）古い建築の持っている魂が、私達に理解されていないのではないか」という思いが募り、当時の東京日日新聞（現在の毎日新聞））の「生活の断片」というコラム欄に「明治の愛惜」というタイトルで「鹿鳴館の建築を保存し、明治時代に生まれた人々が心を合せ、所持品や記録などを持ち寄って博物館にしたら、明治を記念する記念館になったろうに」と文章を寄せました。谷口はこの体験に加え、戦火や高度経済成長で明治建築が失われていくのを目の当たりにし、「建築は時代の魂であると同時に、歴史の証言者」であると、明治建築の保存への思いを強くしました。

谷口の構想を実現させたのが土川です。昭和30年台半ばに行われた四高同窓会の席上で、当時東京工業大学で建築を教えていた谷口から積年の明治村構想が提案されました。谷口の思いに共感した土川は、そのような施設は東京に作った方がよいのではないかと東京の私鉄や篤志家に相談を持ちかけましたが、色よい返事が得られず、結局当時自分が副社長を務めていた名古屋鉄道の役員会に諮ることにしました。社内には名古屋鉄道が「明治村」を運営するメリットがどこにあるのかなど、様々な議論が沸き起こりましたが、何とか賛同を得、現在の入鹿池畔約15万坪の土地（現在は約30万坪）と初期の建設資金を引き出すことに成功。昭和37年財団法人を設立し、明治村構想が実現に向けてスタートしました。どこかで明治建築が取り壊されるという情報を得ると、救急車の如く駆けつけ、遺す必要があると判断したものは、所有者から譲り受け、実測・解体・輸送のプロセスを経て移築復原を行うという、地味で手間も費用もかかる仕事に取り組み、昭和40年に15棟の建造物を展示する博物館として開館しました。その後も明治建築の救助活動は続き、今日では60棟を超える建造物、そして3万件を超える歴史資料を収蔵するほどとなりました。

もう1人、同窓会に参加していた忘れてはならない人物がいます。その人の名は、田山方南（信郎）です。谷口、土川と同級の田山は、三重県伊賀上野出身で、四高文科で剣道部員として土川とともに道場で汗を流し、その後、東京帝国大学国史学科へ進みました。卒業後は国宝鑑査官、特に墨蹟の専門家として美術館博物館の役員を務めました。谷口に請われて財団法人明治村の役員として文化財保護や明治村茶会の運営に尽力した彼や彼の集めた書は明治村へ寄贈され、現在も明治村の和風建築の床を飾り、建物に明治という時代の息吹きを与えています。

あの同窓会の会場に、彼らが集わなかったなら、今日の明治村は存在しなかったかもしれません。

博物館明治村学芸員　中野 裕子

谷口 吉郎　たにぐち・よしろう

略年譜

1904(明治37)年　金沢に生まれる
1922(大正11)年　金沢二中(現・金沢錦丘高校)より第四高等学校理科甲類に入学
1926(大正14)年　第四高等学校を卒業し、東京帝国大学工学部入学
1928(昭和3)年　東京帝国大学工学部建築学科卒業
1929(昭和4)年　東京工業大学講師
1934(昭和9)年　東京工業大学助教授
1938(昭和13)年　駐独日本大使館の日本庭園造園のため
ベルリン出張(～1939)
1943(昭和18)年　東京工業大学教授
1949(昭和24)年　慶応大学校舎4号館・学生ホール及び藤村記念館により
第1回日本建築学会賞作品賞受賞
1956(昭和31)年　秩父セメント第2工場により第8回日本建築学会賞作品賞受賞
1965(昭和40)年　東京工業大学を定年退官し、名誉教授。
博物館明治村開園し、初代館長となる
1973(昭和48)年　文化勲章受章
1979(昭和54)年　逝去

土川 元夫　つちかわ・もとお

略年譜

1903(明治36)年　愛知県一宮町(現・一宮市)に生まれる
1922(大正11)年　愛知一中(現・旭丘高校)より第四高等学校理科甲類に入学
1926(大正14)年　第四高等学校を卒業し、京都帝国大学法学部入学
1928(昭和3)年　京都帝国大学を卒業し、名古屋鉄道入社
1945(昭和20)年　名古屋鉄道運輸部長。
運輸部長のまま初代名鉄労組執行委員長
1946(昭和21)年　名古屋鉄道取締役
1961(昭和36)年　名古屋鉄道取締役社長に就任
1962(昭和37)年　財団法人明治村設立
1965(昭和40)年　博物館明治村開園
1967(昭和42)年　名古屋鉄道が土地・資金を提供し京都大学霊長類研究所設立
1968(昭和43)年　名古屋商工会議所会頭
1971(昭和46)年　名古屋鉄道取締役会長に就任
1973(昭和48)年　勲一等瑞宝章受章
1974(昭和49)年　逝去

コラム　明治村に残されている四高の建物

博物館明治村は、四高の同級生であった名鉄社長・土川元夫氏と建築家・谷口吉郎氏の二人の話のなかから生まれたこともあり、四高の建物が２棟、移築されて遺されている。一つは四高の武道場「無声堂」、もう一つは「物理化学教室」である。

「無声堂」は、1917(大正6)年に建てられた、柔道、剣道、弓道三つの道場を兼ね備えた大きな洋風建築物である。道場の床には工夫がみられ、柔道場の床は弾力を増すため床下にスプリングを入れ、剣道場の床は音の反響を良くするためその下に共鳴用の溝を掘っている。弓道場の正面は、雨戸を入れる戸袋まで左右に開くことができ、遮るものの全くない横長の空間が現れるようになっている。各部の所属者の名札もそのまま残されており、柔道部には正力松太郎や井上靖、剣道部には土川元夫、弓道部には中谷宇吉郎などの名札が今も掲げられている。

「物理化学教室」は、1890(明治23)年に創建され、金沢大学理学部が城内に移転する1964(昭和39)年まで使用されていた建物である。元はH型の大型建物であったが、明治村では中央部分だけを移築・保存している。正面入り口の左右に階段教室があり、非常に急な傾斜で、どこからでも正面の黒板や実験用テーブルがよく見えるようになっている。黒板の裏にはドラフト・チャンバーが隠れており、上下可動式の黒板を上げるとそれがあらわれるようになっている。この建物の設計者は久留正道。明治期学校建築の功労者で、西洋建築の理論や技術の研究を行って「学校建築設計大要」等を著している。この建物もその理論に従って設計されている。また、この建物内には土川元夫顕彰室も置かれている。

「無声堂」。手前から柔道場、剣道場、弓道場となっている。

「物理化学教室」の正面。左右に階段教室がある。

2 医大・薬専・工専・師範・高師・青師の伝統

◇金沢医学専門学校・金沢医科大学

明治中期、政府は各県の医学校を廃止し、拠点に官立の高等中学校医学部を置いて医学教育を集積する方針を立てた。種痘所以来の医学教育の伝統をひく金沢はその一つに選ばれ、1887(明治20)年第四高等中学校医学部が置かれ、1894年に第四高等学校医学部と改称された。1901年、制度改革で四高医学部は独立して金沢医学専門学校となり、ついで臨床講義と実習の場であった県立金沢病院が小立野に移転すると、医専も小立野に移転。さらに1923(大正12)年、官立医科大学に昇格した。官立医科大学は全国に6校設置され、これを前身とする大学は今も「旧六」と呼ばれている。

1925年ごろの金沢医科大学

◇金沢医科大学附属薬学専門部

1889年、第四高等中学校医学部に薬学科が付設され、その後も金沢医学専門学校までは薬学科であった。1923年の官立医科大学設置にあたり、薬学教育の医学教育に対する独自性が認識され、附属薬学専門部が誕生した。

昭和初期の附属薬学専門部校舎

◇金沢高等工業学校・金沢工業専門学校

日清戦争後の産業革命によって工業が発展し始めると、そのための人材育成の要望が高まり、日本各地の工業都市で高等工業学校設置の要望が高まった。金沢でも明治末期からそうした動きが高まり1918年には寄付により校地も確保できた。1919年原敬内閣が誕生し高等教育拡大の方針が出されると、高等工業学校設置の金沢設置が決定し、翌年開校した。その後の戦時体制のなかで技術者需要が拡大し、学科数・定員数が急増。1944年には金沢工業専門学校に改称された。戦後は学科・定員を整理しながら、日本の科学技術振興を担う観点から精密機械科の設置などの実質的な拡充が行われた。

大正期の金沢高等工業学校

◇石川師範学校

明治期に複雑な変遷を経た師範学校も、1898年に石川県師範学校となって一旦落着いた。教育は男女別でおこなわれており、1913年金沢南郊の野村(現・金沢市弥生)に新校舎ができて男子部が移転すると、翌年広坂に残った女子部は金沢女子師範学校と改称したが、一人の校長が２校を兼ねた。1943年に師範学校の官立化が行われ、両校は再度合併され、官立石川師範学校となった。

◇金沢高等師範学校

アジア・太平洋戦争開戦後、戦争遂行のために科学教育振興がはかられ、理数科中学教員養成のための高等師範学校増設の方針が出された。金沢はその誘致に名乗りを上げ、1944年金沢高等師範学校が開校した。これは理科のみの学校で、金沢市立中村町小学校の一角に置かれた。1946年に野田町に移転(現在の自衛隊駐屯地)。1947年附属中学校(旧制)が設置され、これが金大附属高校の前身である。

野田町の金沢高等師範学校

◇石川青年師範学校

1935年、勤労青年に対して職能教育と軍事教練を行う青年学校が設置されると、そのための教員養成学校が必要になり、1937年石川県立青年学校教員養成所、石川県立女子青年学校教員養成所が設置された。これが1944年に合併され、官立青年師範学校となった。戦後は新制中学校の職業科教員の養成を担った。

石川師範学校歴代校長一覧

代数	校長名	在職期間
初代	野村彦四郎	1875(明治8)年10月～1877(明治10)年9月
2代	内山　行貫	1877(明治10)年9月～1883(明治16)年1月
校長心得	長尾　　含	1883(明治16)年1月～1883(明治16)年8月
校長心得	土師雙太郎	1883(明治16)年8月～1886(明治19)年12月
3代	桧垣　直吉	1886(明治19)年12月～1888(明治21)年1月
校長事務代理	土師雙太郎	1888(明治21)年1月～1888(明治21)年3月
校長補	橋本　一済	1886(明治21)年3月～1891(明治24)年2月
校長補	加藤　鎮二	1891(明治24)年2月～1891(明治24)年6月
4代	内山　行貫	1891(明治24)年6月～1897(明治30)年10月
5代	堀　義太郎	1897(明治30)年10月～1899(明治32)年6月
6代	森　慎一郎	1899(明治32)年6月～1901(明治34)年1月
7代	鈴木直三郎	1901(明治34)年1月～1903(明治36)年1月
校長事務取扱	相沢英二郎	1903(明治36)年1月～1903(明治36)年5月
8代	荘司　力松	1903(明治36)年1月～1906(明治39)年9月
9代	新荘　義之	1906(明治39)年9月～1911(明治44)年2月
10代	中山　文雄	1911(明治44)年2月～1915(大正4年)4月
11代	八木　光貫	1915(大正4年)4月～1918(大正7年)10月
12代	根岸　福弥	1918(大正7年)4月～1921(大正10年)11月
13代	副島　松一	1921(大正10年)11月～1929(昭和4年)4月
14代	今井　正親	1929(昭和4年)4月～1933(昭和8年)4月
15代	中島　正勝	1933(昭和8年)4月～1936(昭和11年)3月
16代	苫爪恵三郎	1936(昭和11年)3月～1938(昭和13年)4月
17代	今井　嘉福	1938(昭和13年)4月～1942(昭和17年)3月
18代	田沢　次郎	1942(昭和17年)3月～1943(昭和18年)4月
19代	清水　暁昇	1943(昭和18年)4月～1950(昭和25年)10月

金沢高等師範学校歴代校長一覧

代数	校長名	在職期間
初代	倉林源四郎	1944(昭和19)年4月～1945(昭和20)年6月
2代	塩野　直道	1945(昭和20)年6月～1946(昭和21)年12月
校長事務取扱	樫本　竹治	1946(昭和21)年12月～1947(昭和22)年9月
3代	庄司　彦六	1947(昭和22)年9月～1952(昭和27)年3月

石川青年師範学校歴代校長一覧

代数	校長名	在職期間
初代	五坪　茂雄	1944(昭和19)年4月～1946(昭和21)年5月
2代	難波　得三	1946(昭和21)年5月～1949(昭和24)年7月

浅野三千三　あさの・みちぞう

略年譜

1894(明治27)年　東京・深川に生まれる
1919(大正8)年　東京帝国大学医学部薬学科卒業。朝比奈泰彦に師事
1925(大正14)年　金沢医科大学附属薬学専門部教授
1926(昭和元)年　薬学博士の学位を取得
1927(昭和2)年　ドイツのフライブルクのウィーラントの下に留学、化学と生化学の結合を研究(～1929)
1929(昭和4)年　金沢医科大学附属薬学専門部主事に就任
1936(昭和11)年　「地衣脂肪酸並びにブルヴィン酸系色素に関する研究」で学士院賞受賞
1938(昭和13)年　東京帝国大学伝染病研究所(現・医科学研究所)化学部長として転任
1944(昭和19)年　東京帝国大学医学部薬学科教授となる(伝染病研究所は併任)
1948(昭和23)年　逝去

金沢医学専門学校・金沢医科大学歴代校長一覧

校名	代数	校長名	在職期間
金沢医専	初代	高安　右人	1901(明治34)年10月～1923(大正12)年3月
金沢医科大学			1923(大正12)年4月～1924(大正13)年4月
	2代	須藤　憲三	1924(大正13)年4月～1932(昭和7)年4月
	3代	石坂　伸吉	1932(昭和7)年4月～1954(昭和29)年4月

＊金沢大学への統合後も金沢医科大学は 1960 年まで存続し、医学部長が学長を兼務した。

金沢医科大学附属薬専門部主事・部長一覧

代数	校長名	在職期間
初代主事	西村真一郎	1923(大正12)年4月～1931(昭和6)年7月
2代	浅野三千三	1931(昭和6)年7月～1939(昭和14)年3月
3代	鵜飼　貞二	1939(昭和14)年4月～1944(昭和19)年6月
初代部長		1944(昭和19)年7月～1951(昭和26)年3月

金沢高等工業学校・金沢工業専門学校歴代校長一覧

校名	代数	校長名	在職期間
金沢高工	初代	青戸　信賢	1920(大正9)年12月～1941(昭和16)年3月
	2代	森　慶三郎	1941(昭和16)年3月～1943(昭和18)年10月
	3代	横山　盛彰	1943(昭和18)年10月～1944(昭和19)年4月
金沢工専	初代		1944(昭和19)年4月～1951(昭和26)年3月

高安 右人　たかやす・みきと

略年譜

1860(万延元)年　肥前国小城郡西多久村(現・佐賀県多久市)に生まれる
1887(明治20)年　帝国大学医科大学(現在の東京大学医学部)卒業
1888(明治21)年　第四高等中学校医学部着任。金沢病院眼科長兼任。
1890(明治23)年　第四高等学校医学部教授
1899(明治32)年　ドイツ留学(～1901)
1901(明治34)年　四高医学部が独立して金沢医学専門学校となり、校長就任(～1923)
1903(明治36)年　金沢病院長兼任。学位を受ける。
1908(明治41)年　第12回日本眼科学会総集会にて「奇異なる眼科網膜中心血管の変化の一例」(「高安病」の最初の報告)を発表。これを『十全会雑誌』50号に「奇異なる網膜血管の変状に就て」として発表。
1923(大正12)年　金沢医専が官立金沢医科大学となり、初代学長に就任
1924(大正13)年　退官。金沢市味噌蔵町で開業。
1934(昭和9)年　大分県別府に転居
1938(昭和13)年　逝去

塩野 直道　しおの・なおみち

略年譜

1898(明治31)年　島根県簸川郡園村(現・出雲市)に生まれる
1919(大正8)年　第三高等学校を卒業し、東京帝国大学理学部物理学科入学
1922(大正11)年　東京帝国大学卒業。松本高等学校教授となる
1924(大正13)年　文部省図書監修官に就任
1935(昭和10)年　国定教科書『尋常小学算術』(いわゆる「緑表紙」)を編纂・発行(～1940)
1942(昭和17)年　文部省図書局第二編修課長
1945(昭和20)年　金沢高等師範学校校長に就任
1946(昭和21)年　米国教育使節団来日に際し日本側委員。教職追放
1947(昭和22)年　金沢高等師範学校長退官。公職追放
1951(昭和26)年　教職追放解除
1952(昭和27)年　公職追放解除。新興出版社啓林館取締役に就任
1954(昭和29)年　日本数学教育会理事(～1962)
1969(昭和44)年　逝去

4 金沢大学の発展と「創造」力(1949～2012)

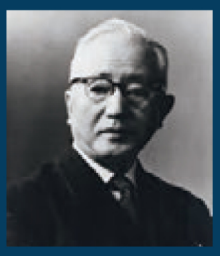
1949(昭和24)年5月、石川県内の高等教育機関すべてを統合する形で、新制・金沢大学が誕生しました。メインキャンパスは、明治以降、第9師団がその本拠としていた金沢城址に置かれ、戦後における金沢の軍都から平和な学都への転換を象徴するものとなりました。ただ、現実には前身校のキャンパスがそのまま利用されたため、市内外にキャンパスのある「たこ足」状態でのスタートとなり、それらをいかに統合し一体感を作っていくかが一つの大きな課題でした。この課題は、1953年の教育学部の城内移転、1964年の理学部の城内移転である程度達成され、「お城のなかの大学」として全国的に有名になっていきました。

新制金沢大学のもう一つの大きな課題は、旧帝大並みへの大学の発展でした。もともと北陸帝国大学設置運動が母体となって金沢大学が生まれたという経緯もあり、教育・研究・設備・規模等において帝大に近づく努力が続けられました。大学院が次々と開設されたのも、こうした努力の成果でした。しかし、このような拡充・発展にとって城内キャンパスはあまりに手狭でした。また60年代ごろから一般開放の問題や文化財保護の問題なども出てきて、次第に金沢城内には居づらくなってきます。こうした状況のなかで移転問題が浮上し、1989(平成元)年からの角間移転へとつながっていきました。

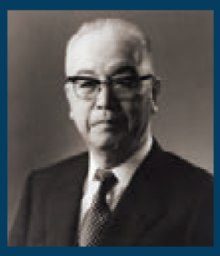
金沢大学が角間移転を行っていた90年代・00年代は、日本の大学システムが大変動にみまわれた時代でした。大学設置基準の大綱化にはじまる教育改革・組織改革の流れは、やがて政府の行財政改革とリンクし、国立大学の法人化へと展開しました。2004年、国立大学法人金沢大学が設立され、新たに大学憲章を制定し、本学を「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」と位置づけます。この位置づけのもと、2008年には学部学科制を廃止し、学生所属を3学域16学類に、教員所属を3研究域15系とする全く新しい教育・研究体制をとることになりました。金沢大学は、その創基から150年を迎え、過去を顧みてその立ち位置を確認するとともに、その基礎の上に立って新たな地平を「創造」していこうとしています。

●金沢大学歴代学長

初代・戸田正三
1949.9～1961.9



2代・石橋雅義
1961.9～1967.9



3代・中川善之助
1967.9～1973.9

4代・豊田文一
1973.9～1979.9

5代・金子曽政
1979.9～1985.9

6代・本陣良平
1985.9～1989.9

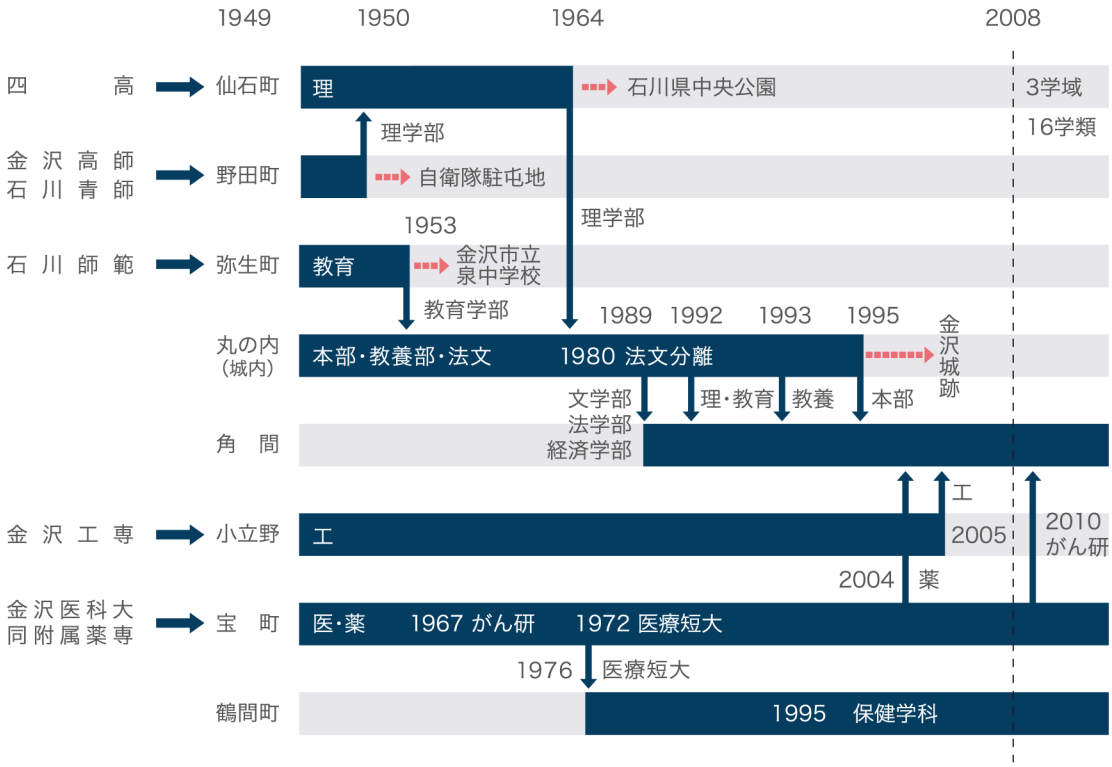
7代・青野茂行
1989.9～1993.9

8代・岡田 晃
1993.9～1999.9

9代・林勇二郎
1999.9～2008.3

10代・中村信一
2008.4～

◆主要キャンパス（学部所在キャンパス）の変遷（模式図）



創基150年記念　学長特別講義「金沢大学―伝統と創造―」

2012（平成24）年が金沢大学創基150年に当たることを記念して、その記念の年に入学した1年生を対象とする、中村信一学長の講義「金沢大学―伝統と創造―」が行われました。これは、1年前期必修科目「大学・社会生活論」の1回分として実施され、2学類合同講義も入れて全部で11回の講義が行われ、全1年生が聴講しました。前身校からの歴史や著名な出身者、最新の研究まで紹介され、金沢大学の伝統をふりかえり、これからの創造へつなげていこうという考えが明確に示された講義でした。

学長講義の風景（金沢大学HPより）

この講義のなかで紹介された著名な出身者は、西田幾多郎、鈴木大拙、中川善之助、中川了滋、宮本憲一、真田信治、山出保、渡辺大樹、中谷宇吉郎、崎田文二、飯森里安、南部健一、進村武男、中沢正隆、谷口吉郎、石浦正寛、岡本肇、浅野三千三、真田弘美の各氏。学長講義で使用されたこれら人物についてのスライドは、パネルにして今回の特別展で展示しています。

法学類の先達として
紹介された中川了滋・
元最高裁判事

経済学類の先達として
紹介された宮本憲一・
元滋賀大学長

電子情報学類の先達として
紹介された中沢正隆・
東北大学名誉教授

医学類の先達として紹介された
故岡本肇・元がん研究所長

金沢大学の研究力

「研究大学」を標榜する金沢大学では、基礎研究から実践研究まで卓越した知の「創造」に務め、新たな学術分野の開拓に努めています。こうした研究をバックアップする組織として、2012(平成24)年4月に、従来からのフロンティアサイエンス機構(FSO)とイノベーション創生センターを統合した、先端科学・イノベーション推進機構(O-FSI) が誕生しました。その目的について、機構長である山崎光悦理事(研究国際担当)は次のように述べています。

本機構は, 部局等を越えた学際的融合新領域の創出により金沢大学の教育研究の一層の高度化を推進し, かつ基礎研究から応用研究まで一貫した研究支援と産学官連携による研究成果の社会還元を促進し, もって本学の教育研究の活性化と社会貢献に資することを目的としています。(先端科学・イノベーション推進機構HPより)

この機構の研究部門は、FSOを引き継いだ５つの重点研究プログラムから成り立っており、そこに人材・資金・スペースなどの資源を配分し、金沢大学の特色ある研究や教育研究組織(新専攻や新センター)として定着することを目指しています。

また、独立行政法人日本学術振興会が、将来世界の科学・技術をリードすることが期待される若手・女性・地域の研究者を支援する「最先端・次世代研究開発プログラム」に、金沢大学から6件が採用されています。

さらに、3つの研究域にはそれぞれ2つずつの附属研究センターが設けられ、その成果により、金沢大学の研究活動を強く特徴づけることが期待されています。

5つの重点研究プログラム

プログラム名	リーダー
環日本海域に見る土地・風・海の環：環日本海域を照準した地球環境研究拠点形成	早川　和一
世界最先端AFM技術によるナノバイオロジー研究	安藤　敏夫
「新しい海洋底地球科学」の拠点形成を目指して：陸上地質体からのアプローチ	荒井　章司
栄養代謝関連症候群に対する先端医療の開発	金子　周一
発達・学習・記憶と障害の革新脳科学の創成：文理架橋総合研究の全学的取り組みと挑戦の第二ステージ	東田　陽博

6件の最先端・次世代研究開発支援プログラム

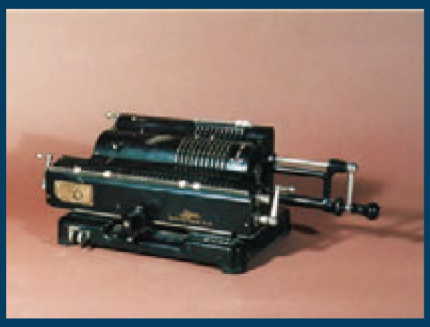
プログラム名	リーダー
覚醒制御システムのコネクトミクス：睡眠・覚醒制御系の全解明	櫻井　武
グローバル化による生殖技術の市場化と生殖ツーリズム：倫理的・法的・社会的問題	日比野由利
有機エアゾルの超高感度分析技術の確立と応用に基づく次世代環境影響評価	松木　篤
がん幹細胞を標的とする薬剤を探索するための革新的インビドロがん幹細胞モデル系の開発	高橋　智聡
抗がん剤抵抗性がん幹細胞をターゲットとする革新的がん治療戦略	仲　一仁
遺伝子改編酵素群AID/APOBECがつくるB型肝炎慢性化と発癌の機序	村松　正道

3研究域の附属研究センター

研究域名	センター名
人間社会	地域政策研究センター 国際文化資源学研究センター
理工	バイオAFM先端研究センター サステナブルエネルギー研究センター
医薬保健	健康増進科学センター 脳・肝インターフェースメディシン研究センター

金沢大学の研究力

金沢大学資料館では、金沢大学に在籍した教員の教育・研究に関わる資料で、優れた研究成果等本学にとって貴重な資料や、系統的に収集することによりその分野の学史や教育史がたどれる資料を収集しています。そのため、さまざまな研究を支えた各種の学術標本が保存されており、また現在も寄贈を受けています。今回の特別展では、そうしたものの一端を展示します。



工学部旧蔵のタイガー連乗式計算機20号
(手回し式)

古谷健太郎氏(元教育学部教授)所蔵カメラ

附属病院で使われていたCanon AX-1
(電子式卓上型プログラマブル計算機)

創基 150年略年表

文久 2	文久	1862	加賀藩認可の種痘所が、金沢彦三八番丁に開設される
慶応 3	慶応	1867	加賀藩、卯辰山に養生所を開設し、製薬所と薬圃を付設
明治 3	明治	1870	金沢大手町旧津田玄蕃邸（加賀藩家老）に金沢医学館を開設　館内に病院を付設
明治 7		1874	石川県は小学校教員養成のため兼六園成巽閣石川県英学校内に集成学校を設置
明治 7		1974	集成学校を仙石町に移転 ついで石川県師範学校に改称
明治 8		1975	石川県は松原町女児小学校内に石川県女子師範学校を設置 ついで仙石町に移転
明治 9		1876	金沢仙石町に公立の中学師範学校を設置し、校名を啓明学校とする
明治 10		1877	石川県師範学校・同女子師範学校を広坂通６番地に移転 ついで石川県第一師範学校・同女子師範学校に改称
明治 10		1877	啓明学校を石川県中学師範学校に改称
明治 12		1879	金沢医学所を金沢医学校に改称
明治 13		1880	石川県第一師範学校を石川県金沢小学師範学校に改称 同女子師範学校を石川県金沢女子小学師範学校に改称
明治 14		1881	中学師範学校を石川県専門学校に改称
明治 16		1883	石川県金沢師範学校と同女子師範学校を合併 石川県師範学校（男子部・女子部）に改称
明治 17		1884	金沢医学校が石川県甲種医学校に昇格
明治 19		1886	石川県師範学校を石川県尋常師範学校に改称
明治 20		1887	金沢に第四高等中学校設置 石川県専門学校は第四高等中学校に継承され、翌年廃止
明治 20		1887	金沢に第四高等中学校医学部設置 石川県甲種医学校は第四高等中学校の医学部に継承され、翌年廃止
明治 22		1889	第四高等中学校医学部に薬学科を付設
明治 22		1889	石川県尋常師範学校を広坂通 88 番地に移転
明治 27		1894	第四高等中学校を第四高等学校に改称
明治 31		1898	石川県尋常師範学校を石川県師範学校に改称
明治 34		1901	四高医学部が独立し、金沢医学専門学校として新設
明治 45		1912	金沢医学専門学校を小立野に移転
大正 3	大正	1914	石川県師範学校男子部が野村（弥生町）に移転 女子部は広坂にて分立し、同女子師範学校となる
大正 9		1920	金沢高等工業学校を崎浦村（小立野）に設置
大正 11		1922	金沢医学専門学校附属病院に看護婦養成科を設置
大正 12		1923	金沢医学専門学校、官立医科大学に昇格し金沢医科大学となる 附属医学専門部及び附属薬学専門部を設置
昭和 14	昭和	1939	金沢医科大学に臨時附属医学専門部を設置
昭和 17		1942	金沢医科大学に附属結核研究所を設置
昭和 18		1943	石川県師範学校と同女子師範学校を合併し、官立石川師範学校（男子部・女子部）となる
昭和 19		1944	金沢高等師範学校を設置
昭和 19		1944	石川県青年学校教員養成所と同女子青年学校教員養成所を合併し、官立石川青年師範学校となる
昭和 19		1944	金沢高等工業学校を金沢工業専門学校に改称
昭和 21		1946	北陸総合大学設置期成同盟会が発足
昭和 22		1947	学制改革に伴い、北陸総合大学期成同盟会を北陸総合大学設立準備委員会に改組
昭和 24	昭和	1949	国立学校設置法（法律第 150 号）の公布により、金沢大学が発足。法文・教育・理・医・薬・工の６学部。本部等を金沢城内に置く
昭和 30		1955	大学院医学研究科の設置
昭和 38		1963	大学院理学研究科の設置
昭和 39		1964	大学院薬学研究科の設置
昭和 40		1965	大学院工学研究科の設置
昭和 42		1967	医学部癌研究施設と結核研究所を統合し、がん研究所を設置
昭和 46		1971	大学院法学研究科の設置
昭和 47		1972	大学院文学研究科の設置 医療技術短期大学部の設置
昭和 53		1978	評議会で総合移転（200ha 構想）の方針を決定
昭和 55		1980	法文学部の改組　文・法・経済学部の設置
昭和 55		1980	臨時評議会で、総合移転地を「角間地区」に決定
昭和 57		1982	大学院教育学研究科の設置
昭和 59		1984	大学院経済学研究科の設置
昭和 59		1984	「総合移転整備事業建設工事起工式」を挙行、造成工事（調整池）の着工
昭和 60		1985	大学院薬学研究科生命科学専攻（博）の設置
昭和 62		1987	大学院自然科学研究科（博）の設置
平成元	平成	1989	文学部・法学部・経済学部棟及び附属図書館が完成・移転 金沢大学総合移転（第Ⅰ期）の開始
平成 4		1992	理学部棟及び教育学部棟が完成・移転
平成 5		1993	大学院社会環境科学研究科（博）の設置
平成 5		1993	教養部棟（現・総合教育棟）が完成・移転
平成 6		1994	本部棟（事務局・学生部、保健管理センター）が完成（平成７年移転）
平成 7		1995	医学部保健学科の設置
平成 8		1996	教養部の廃止 教養教育機構（現・共通教育機構）の設置
平成 10		1998	「金沢大学総合移転第Ⅱ期整備工事起工式」を挙行
平成 12		2000	「金沢大学サテライト・プラザ」開設
平成 12		2000	大学院医学研究科を大学院医学系研究科に改称 大学院医学系研究科保健学専攻（修）の設置
平成 13		2001	医学部附属病院新病棟が完成・移転
平成 14		2002	21 世紀 COE プログラム「環日本海域の環境計測と長期・短期変動予測」採択
平成 14		2002	医学系研究科保健学専攻（博士後期課程）の設置 薬学部の２学科を総合薬学科に改組
平成 16		2004	国立大学法人金沢大学設立、法務研究科（法科大学院）の設置
平成 16		2004	サンタ・クローチェ教会（イタリア）の壁画修復・研究調査に関する協定書締結
平成 16		2004	21 世紀 COE プログラム「発達・学習・記憶と障害の革新脳科学の創成」採択
平成 16		2004	金沢大学総合移転（第Ⅱ期）の開始（平成 16 年薬学部、平成 17 年工学部移転）
平成 17		2005	医学部附属病院新中央診療棟が完成・移転
平成 18		2006	大学院人間社会環境研究科の設置
平成 20		2008	３学域・16 学類スタート
平成 21		2009	大学院教育学研究科（教育実践高度化専攻）の設置
平成 21		2009	附属病院新外来診療棟が完成・移転
平成 22		2010	がん研究所棟が完成・移転
平成 24		2012	創基150年

出品資料目録

❶. 金沢大学創基 150 年記念事業			
1	記念クリアファイル　8 種	2012 年	
2	記念クリアファイル原図　「ヘルツェル外国語教育用掛図　町」	1890 年ごろ	金沢大学附属中央図書館
3	記念クリアファイル原図　「モラン機械掛図第 30 図　蒸気機関車」	1856 年	金沢大学附属中央図書館
4	記念クリアファイル原図　「ハバード周期律表」	1925 年	金沢大学附属中央図書館
5	記念クリアファイル原図　「人体整理図第一　骨格」	1884 年	金沢大学附属中央図書館
6	記念クリアファイル原図　「ロビンソン動物掛図第 2 図　鳥類」	1855 年	金沢大学附属中央図書館
7	記念クリアファイル原図　「地質一覧　第一」	1882 年	金沢大学附属中央図書館
8	記念クリアファイル原図　「蜀丞相諸葛武侯祠堂碑拓本」	立碑 809 年／採拓 1931 年以前	金沢大学附属中央図書館
9	記念クリアファイル原図　「加賀藩年中行事図絵　犀川大橋」	1932 年	金沢大学附属中央図書館
❷. 金沢大学の源流（1862 ～ 1889）			
10	黒川良安由緒書（先祖由緒幷一類附帳）	1870 年	金沢市立玉川図書館近世史料館
11	蓮湖魚毒説（黒川良安）	1852 年	金沢市立玉川図書館近世史料館
12	加賀藩卯辰山養生所「病院仕法書」	1867 年	金沢市立玉川図書館近世史料館
13	藤本純吉筆記・スロイス講義録『動物学』	1871 年	金沢市立玉川図書館近世史料館
14	藤本純吉筆記・ホルトルマン講義録『実験化学』	1875 年	金沢市立玉川図書館近世史料館
15	藤本純吉筆記・ホルトルマン講義録『有機化学』	1875 年	金沢市立玉川図書館近世史料館
16	官許動物学　大田美濃里訳校、斯魯斯氏講義	1874 年	金沢市立玉川図書館近世史料館
17	マグデブルグ半球		本館
❸. 前身校の伝統（1890 ～ 1949）			
①. 第四高等学校と 4 つのエピソード			
18	西田幾多郎編『廓堂片影』（教育研究会）	1931 年	金沢大学附属中央図書館
19	北条時敬校長時代の四高集合写真 明治３３年	1900 年	本館
20	北條文庫『前田家由来』		金沢大学附属中央図書館
21	南下軍の幟		本館
22	南下軍（柔道部日誌）　大正 5 年／昭和 2 年 8 月～ 3 年 7 月	1916・1928 年	本館
23	南下軍バッジ		本館
24	中野重治在学当時の北辰会雑誌（84・86・87・90・92・99）	1919 ～ 1924 年	金沢大学附属中央図書館
25	北辰会雑誌 96 号マイヨール版	1923 年	石川県立歴史博物館
26	旅人	1922 年	金沢大学附属中央図書館
27	文科タイムス	1921 年	石川県立図書館
28	中野重治の窪川鶴次郎宛書簡及び詩稿　2 通	1925 年	石川近代文学館
②. 医大・薬専・工専・師範・高師・青師の伝統			
29	年平均湿度図・年平均日照図		石川県立自然史資料館
30	塩野直道著『數學教育論』（河出書房）	1947 年	金沢大学附属中央図書館
31	国定教科書『尋常小学算術』（緑表紙）全 12 巻	1935 ～ 1940 年	個人
32	紹野義夫氏旧蔵　五万分一地形圖帖　第 13 分冊		石川県立自然史資料館
❹. 金沢大学の発展と「創造」力（1949 ～ 2012）			
33	金沢大学総合移転基本設計全体模型		本館
34	かんらん岩		荒井章司研究室
35	はんれい岩		荒井章司研究室
★研究を支えたモノたち			
36	SONY 電子式卓上計算機	1971 年	本館
37	横河 Hewlett-Packard 社 MODEL 9100A	1970 年	本館
38	SHARP コンペック	1973 年	本館
39	Tiger 連乗式計算機	1954 年	本館
40	横河 Hewlett-Packard 社 HP-35	1972 年	本館
41	Diehl 社 DV-12	1970 年ごろ	本館
42	Canon 電子式卓上型プログラマブル計算機	1979 年	本館
43	Casio 電子式卓上計算機	1970 年	本館
44	Nippon Caluculator 手動式卓上計算機	1964 年	本館
45	Monroe Calculation Machine Company 電動式卓上計算機	1964 年	本館
46	古谷健太郎氏所蔵カメラ		本館
47	計算尺		本館
48	コンパス		本館

このほかに追加展示があります

◆協力者・協力機関（50音順、敬称略）

荒井章司
石川近代文学館
石川県立自然史資料館
石川県立図書館
石川県立歴史博物館
伊藤伸也
鰻目卯女
金沢市立玉川図書館近世史料館
金沢大学創基150年記念事業準備委員会
金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター
金沢大学附属中央図書館
鹿野勝彦
（株）コマツ
下村達夫
博物館明治村
早川和一
北國新聞社
丸山圭一
読売新聞社（正力松太郎写真提供元）

◆執筆者（掲載順）

古畑徹（資料館長）
柴田正良（附属図書館長）
井上好人（金沢星稜大学）
中野裕子（博物館明治村）

◆主要参考文献

○『金沢大学十年史』、金沢大学、1960
○金沢大学50年史編纂委員会『金沢大学五十年史』部局編・通史編、金沢大学50周年記念事業後援会、1999-2001
○金沢大学創基150年史編纂部会『金沢大学創基150年史』、北國新聞社、2012
○コマツ粟津工場70周年記念誌編集プロジェクトチーム『MADE IN AWAZU：コマツ粟津工場70周年記念誌』、コマツ粟津工場、2008
○小松商工会議所機械金属業部会『沈黙の巨星：コマツ創業の人・竹内明太郎伝』、北國新聞社、2006
○佐野眞一『巨怪伝：正力松太郎と影武者たちの1世紀』上下、文春文庫、2000
○塩野先生追想集刊行委員会『隨流導流：塩野直道先生の業績と思い出』、新興出版社啓林館、1982
○松下裕・竹内栄美子編、中野重治著『中野重治書簡集』、平凡社、2012
○松宮哲夫『伝説の算数教科書「緑表紙」：塩野直道の考えたこと』、岩波書店、2007
ほか

金沢大学創基150年記念事業関連企画

人物で見る
金沢大学の150年
～その伝統と創造～

平成24年度 金大資料館特別展

□開催期間
平成24年10月15日(月)～11月16日(金)

□編集・発行
金沢大学資料館

□発行日
平成24年10月15日

□印刷
能登印刷株式会社